

はじめに

「体験の非共有性はいかに乗り越えられるか」という課題設定の背景には、直接に戦争を体験した世代がいなくなることへの強い危機感と焦燥感がある。しかしながら、非体験者による〈戦争体験〉継承の試みは、実は、日本社会においてすでに一定の蓄積があるように思う。本論でわたしが考えたいのは、直接に戦争を体験していない（少なくともその記憶がない）人たちの〈戦争体験〉である。

本論に登場いただく玉井洋子さん（一九四一年生まれ）は、長く神戸空襲を記録する会（以下、記録する会）の活動に関わり、神戸空襲の体験継承に尽力されてきた。しかしながら、玉井さん自身は空襲の体験者ではなく、一九四一年生まれということもあって自身の戦争体験の直接の記憶はほとんどない。にもかかわらず、玉井さんの〈戦争体験〉の語りは、わたしにとって忘れがたい語りのひとつである。

非体験者である玉井さんのように戦争を〈体験〉したのだろうか。戦争を〈体験〉するというのは、どのような営為なのだろうか。どのような意味において非体験者の〈戦争体験〉は可能なのだろうか。以下では、玉井さんの〈戦争体験〉を中心にわたしの聞き取りの体験も交えながら述べ、非体験者による戦争体験の継承可能性について若干の問題提起ができればと思う。

一、……玉井洋子さんとわたし

わたしが、戦争体験の聞き取りをおこなうようになったきっかけは、二〇〇九年四月、甲南大学人間科学研究所が主催する「子ども時代の戦争体験」についての共同研究に参加したことにある。甲南大学人間科学研究所では、二〇〇八年度から、アジア・太平洋戦争期の子どもたちがどのような体験をし、そ

れがその後の人生にどのような影響を与えたのかをテーマとして、心理学の研究者を中心とする共同研究がおこなわれていた。そこに、歴史研究の立場から関わっていくこととなったわたしは、基本的には心理学の理論と方法にのっとっておこなわれた聞き取り調査についてその成果を報告するとともに（人見、二〇一〇、二〇一一^aなど）、心理学と歴史研究の聞き取りの相補性を検討し（人見、二〇一二^b）、また、オーラル・ヒストリーの手法や課題についても考えるようになった（人見、二〇一三）。

そうした経緯もあって二〇一四年、わたしは、「空襲・戦災を記録する会全国連絡会議第四回神戸大会」（二〇一四年八月三日〔土〕、二四日〔日〕）において、コメントをする機会を得た。空襲体験の聞き取りの経験から、空襲を記録し伝える営みをどのように次世代に継承していくかについて何かコメントをしてほしい、ということであった。わたしがコメントをすることになっていたのは大会二日目のシンポジウムであったが、一日目におこなわれたある報告に、わたしはショックをうけた。

それが、玉井洋子さんの報告である。玉井さんは、記録する会の中心的メンバーのひとりで、会長（当時）の中田政子さんを支えながら（中田さんによれば、ときに中田さんを叱咤しつつ）、記録する会の運営に力を尽くしてこられた。二〇一三年八月一日に除幕式の日をむかえた「いのちと平和の碑」の建設に、中田さんとともに奔走したのも玉井さんである。玉井さんは、神戸では少し知られた書家でもある。玉井さんの腕前を、記録する会が主催する行事の立て看板で目にしたことのある人は多いと思う。「空襲・戦災を記録する会全国連絡会議第四回神戸大会——創る、伝える」の垂れ幕も、「こうべ空襲だより」の題字も、玉井さんによる。その自由闊達な筆運びにわたしは惹かれる。二〇一五年一月、神戸・元町のギャラリーで開催された作品展「裂—saku」で、峠三吉の「原爆詩集 序」を書にした作品は、迫りに満ちていた。

玉井さんの報告は、「私の出会った人たち」と題した一五分ほどの短いものであったが、わたしにとつ

て驚きに満ちていた。

まず、記録する会を支える中心的メンバーのひとりである玉井さんは、実は神戸空襲の体験者ではなかった。甲南大学人間科学研究所の共同研究では、聞き取りの実施にあたり、記録する会に全面的に協力をあおいだ。多くの方が聞き取りに応じてくださったが、そこに玉井さんはいなかった。なぜかと疑問に思っただけで、玉井さんが空襲の体験者ではないとは考えなかった。いまから思うと、記録する会への聞き取りの依頼であったから、空襲を直接体験していない玉井さんは遠慮されたのだと思う。(ある年齢以上の)記録する会のメンバーは空襲の体験者であるはずだ、というわたしの思い込みをまずは反省させられたが、わたしの「ショック」の在処は別にある。

玉井さんは記録する会の歩みを、玉井さんが「出会った人たち」に関するきわめて印象的なエピソードとともにお話しされた。玉井さんが「出会った人たち」のうちのひとりが、三木谷君子さん(一九二〇～一九八七)である。

二、……三木谷君子さんとわたし

三木谷さんは、記録する会の発足当初からのメンバーで、神戸では空襲体験の「語り部」として広く知られた存在である。わたしが記録する会と関わるようになった二〇〇二年前にはもうお亡くなりになっていて、直接お話をうかがったことはない。しかし、わたしは三木谷さんの体験を三木谷さんの娘である中田政子さん(前出、神戸空襲を記録する会前会長)から何度かうかがったことがあり、(知っていた)。

紙幅の関係からその体験の詳細を述べることはできないが、おおよそ以下のようなものである。当時二五歳で妊娠中だった三木谷さんは、一九四五年三月一七日、長女の弘子ちゃん(二歳一〇カ月)を背負って大輪

田橋(現神戸市兵庫区)へと逃げようとした。兵庫運河にかかるその立派な石橋は、いかにも安全に思えた。橋の下の運河に飛び込みたかったが、その途中で将棋倒しになって気を失った。気がつくのとたぐさんの遺体が体の上ののっぺりして、弘子ちゃんは息絶えていた。三木谷さんは、弘子ちゃんを抱きしめようとしたが、三木谷さんの両手両足の皮は火傷でずるむけに垂れ下がっていて、できなかった。動かない我が子をなでながら、ここで一緒に死のうと思っただけ。そう言葉にしたかったが、息苦しくてそれもできなかった。それからまた爆撃があり、ふたたび気づくと橋の東のたもとにいたはずが、西のたもとにいた。弘子ちゃんはいなくなっていた。三木谷さんは弘子ちゃんの遺体をさがして小さな遺体をみつけてはひっくり返した。だが、小さな遺体はあまりにむごたらしく、そのうちできなくなった。

しばらくして家族と会って、気を失った。火傷がひどく、やっとたどり着いた病院でも治療はしてもらえなかった。遺体ならばコンクリートの廊下の端に寝かされて、三日三晩がたった。ようやく医者診察をうけることができたが、おなかの赤ん坊はあきらめるようにといわれた。消毒だけで日々が過ぎた。奇跡的に生きながらえた三木谷さんは、終戦後の九月、赤ん坊を産んだ。それが中田さんである。

一九八二年の「空襲・戦災を記録する会全国連絡会議第二回佐世保大会」で、玉井さんと同宿したのが三木谷さんだった。玉井さんは、ふと、三木谷さんの「足首から入浴後も消えないゴムのあとを不思議に思ってたずね」た。すると三木谷さんは「さらっと」いった。「空襲の火傷のあとよ」。

それをきいた玉井さんは、震撼した。「生身が焼かれたのだ」と。玉井さんはすでに三木谷さんの空襲体験を(知っていた)と思う。しかし、三木谷さんのケロイドは、玉井さんにとって、「はじめて眼にしたその痕跡」だった。このときが、玉井さんにとって空襲をはじめ(知った)瞬間であったに違いない。だからこそ、いまもそのことを思い出して「こころが疼く」のである。

わたしは、玉井さんの衝撃を想像し慄然として、同時に動揺した。

三木谷さんの両手両足に残るケロイドについてわたしは、中田さんの語りによってすでに（知っていた）。中田さんはいった。母の両手両足にはすごいケロイドがあった。ケロイドの部分は皮膚が引きつって毛穴がないのでつるつるとして触るととても気持ち良かった。中田さんと弟妹は、三木谷さんのつるんつるんのケロイドを競い合っただけで触っていたという。

空襲で命にかかわる火傷を負ったのだから、ケロイドが残って当然である。そのときわたしはこれを、戦争と空襲の悲惨さをまだ十分に認識できない子どもたちと、母親の凄惨な空襲体験のギャップを物語る、哀しくもどこかほえましいエピソードとして聞いていた。しかし、その同じ三木谷さんのケロイドが、玉井さんには空襲の強烈な「痕跡」として現れた。おなじケロイドが、こんなにも違う意味をもってわたしの眼前にふたたびおとずれるとは思わなかった。そのことにわたしはつよい「ショック」をうけたのだ。三木谷さんのケロイドが、玉井さんを介してわたしに突きつけたのは、空襲体験を聞くときのわたしの想像力の欠如である。わたしは中田さんの話を聞きながら、中田さんと弟妹にとってのケロイドとして認識していた。そのときわたしは、それが三木谷さんにとって空襲の消えない「痕跡」であること、三木谷さんがケロイドとともに生きてきたことを想像できなかった。わたしは、三木谷さんの空襲体験を彼岸に見ていた。三木谷さんのケロイドがわたしにとってどういう意味をもっているのか、すなわち、わたしは三木谷さんの空襲体験をどのように認識するのか、それを問うものであることに、まったく思いが至っていないかった。

三、……どのように戦争体験を聞くか

戦争体験の聞き取りを重ねるにつれて、わたしには募る不安があった。語り手の体験を聞き取ることが

ほんとうにできているのか。玉井さんの報告を聞きながらわたしは、まさにその不安が的中したと思った。わたしが最初に聞き取りを「怖い」と思ったのは、豊田和子さん（一九二九年生まれ）にインタビューしたときである。それは、聞き手の興味関心が語り手の体験を歪曲して定義づけてしまう危険性を、わたしにつよく意識させる経験であった³。

豊田さんが神戸大空襲に遭ったのは、一六歳のときである。三月一七日、六月五日の二度におよぶ大空襲の体験を豊田さんは、求めにおうじてさまざまなお話されていた。聞き取りの実施以前にわたしは、豊田さんの空襲体験を何度か聞く機会があった。そのため、聞き取りも、空襲体験を中心に語っていただくこととなるだろうと予想していた。

ところで、心理学の理論と方法によっておこなわれるインタビュー調査は、あらかじめいくつかの質問事項を用意して、その質問に答えてもらうかたちですめられる（半構造化面接という⁶）。そのさい、空襲体験をお聞かせください、といった直接的な質問項目はない。生育過程を順にたずねていくなかで、「戦時中にもつとらかったことは何か」という問いが準備されている。

「子ども時代の戦争体験」がその後の人生に与えた影響を考えるという課題設定の背景にあるのは、「トラウマ体験」と「喪失体験」という視点である。トラウマ体験は、その体験の過酷さゆえに、今まで一度も語ったことがない内容である場合があり、しかし、その体験を伏せたままでは体験の意味や、それが人生に与えた影響を見極めることができないような体験である（森、二〇一一）。以下に紹介する豊田さんの体験は、豊田さんにとって扱い難い、触れることが困難であった点で、まさに「トラウマ」という視点でこそ理解できる内容であった。

豊田さんに幼少期の経験をうかがったのち、少女期〜青年期にさしかかったところで、「戦時中にもつとらかったこと」について質問したときである。わたしは、当然空襲体験に言及されるだろうと思っ